

資料を追いかけて……

大塚 喜子

明治四十三年刊行の『大久保利通傳』と『西郷隆盛傳』は著者・勝田孫弥が十五年の歳月を傾けた各々三巻からなる大作である。平成十六年に山口県にあるマツノ書店が復刻して以降、広く知られるようになった。日記や建白書は漢文体で書かれている。辞書を手放せないのは当然としても、漢字の字画の多さに閉口した。戦後に教育を受けた身としては仕方ない。

勝田が同時期に刊行した『甲東逸話』には、大袈裟かも知れないが、ページを捲る手が震えた。例を挙げると、大久保は同郷の勝田に「隆盛の真相を知る者は余を於いて他に無かるべし」と言つて、西郷の伝記を書くよう依頼した数日後に、自身が暗殺された。

大久保の富国強兵策の詳細は西郷傳に、西郷の征韓論については大久保傳に詳しい。セツトで両雄の事跡を記している。

この二冊はドナルドキーン氏が英訳して刊行した。国外で近代日本の研究者が参考にしたかもしれない。私は昨春秋に国会図書館で手にした。随所にキーン氏が描いたイラストとその解説がある。氏の深い見識が見てとれる。私はこのコピーとマイナバーカードをバッグに入れて冬の御所を訪れた。

慶応三年、総裁・議定・参与の三職からなる明治政府が樹立された。参与には下級公家の岩倉と大久保と西郷が任命された。

公家と大名が「公卿の間」で会議した後には、其れを各藩の藩士（薩因備士芸築越肥後久留米会津柳川桑名）に「仮建所」で喚問する仕組みになっていた。下級公家と藩士が出入りできるのはこの仮建所までであった。

「仮建所」と「公卿の間」は広い板敷の廊下を隔て分断されている。真の実力者の参与がこのような扱いを受けざるを得なかったのは、キーン氏によれば朝廷と言う空間の持つ伝統の重みであり、大久保が大坂遷都を、西郷が江戸城明け渡しを主張したのは有効な戦術であったという。

吹き曝しの板敷の「仮建所」に長い時間正座して議定を待った藩士たちを想いながら、私は暫く動けなかった。

